ぎふ どうぼう

No. 92
2006.12

いのちは　つくれない
いのちはいのちから　うまれる

池田勇諦

一九三四年、三重県桑名市に生まれる。東海同朋大学(現、同朋大学)仏教学部卒業・大谷大学大学院博士課程満期退学。同朋大学教授、同学長を勤められ、現在は同朋大学名誉教授。三重教区西恩寺前住職。

廣瀬玲子

岐阜大学医学部付属病院育成医療・女性科医員。産婦人科医。
現在「県立岐阜病院女性外来」で、女性専門の相談にものられるかたわら、小中高の生徒や保護者など一般の方々とも積極的にふれあいをもたれる。ご主人と3人のお子さんと暮らす。

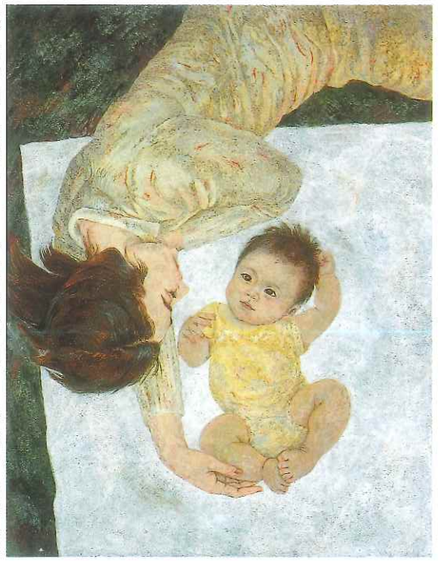
「人間の誕生」という安心・安全を常に求められる医療の現場において、生と死にいつも真剣に向き合う廣瀬玲子先生。
親鸞聖人の教えについて深く問い続けておられる同朋大学名誉教授(真宗学)の池田勇諦先生。
お二人の話から、現場において宗教・仏教に求めるものは何か、真宗の教えはどのように応えるか、「いのちの大切さ―誕生―」を考えてみたいと思います。

誕生

人は、生まれたときなぜ泣くのだろう。
苦しみの世界に生まれてきたから。
人は、子どもが生まれると
　なぜあんなに感動するのだろう。
苦しみの世界に生まれてきたのに。
赤ちゃんを見ているおかあさんは
　なぜあんなにしあわせそうに見えるのだろう。
おかあさんを見ている赤ちゃんは
　なぜあんなにしあわせそうに見えるのだろう。
しあわせそうな母子を見ると
　なぜこちらまでしあわせな気分になれるのだろう。
人はみな、これからの苦しみの現実を知っているのに。
誕生は、不思議の連続。
誕生は、いのちの輝きに出会う瞬間。
誕生は、子どもにとっても親にとっても
　生きる原点であり、出発点。
誕生は、死に向かう原点であり、出発点。

誕生が深まらなければ
生きることも
死ぬことも
深まらない。
だから誕生を振り返ることは、
とても大切で大事なこと。

（詩　櫛田昭裕）



絵／第37回日春展（2002）「静かな一刻」日展会友　南谷具代

編集後記

友だちが、
「お腹の子が女の子ってわかったから、名前を考えたの。新菜（ニーナ）に決めたの。あまり聞かない名前だし、素敵でしょ」と。
そして、女の子を無事出産。しかし命名は決めていた名前とは違って「○○」。
「えっ、どうして変えたの？」と聞くと、
「うまれてきた子の顔を見たら、新菜という名前がどうしてもあわなくって。だから○○にしたの。笑っちゃうでしょ」とおもしろ可笑しく答える友。
「○○」よく耳にする名前にはなったけど、でも我が子の顔を見ながら似合う名前を、一生懸命考え直したという友。親としての眼差しが感じられる友を、なんだか「すてき！」と思いました。

発行　岐阜教区教化委員会
真宗大谷派岐阜教務所
鈴木宏雄
〒500-8054
岐阜市大門町1
Tel.(058)266・1378
編集　岐阜同朋編集委員会

「現代と真宗」

廣瀬玲子 対談 池田勇諦

いのちの大切さ～誕生～

廣瀬　日本の法律では、妊娠22週から（中絶できないという意味において）人のいのちとして認められていますが、私は誕生を「細胞が一つの段階からのいのち」と、考えています。私は仕事の中で日々、女性の心や体の悩みをお聞きすることをしております。

その中で女性たちは、なかなか赤ちゃんが授からないと不妊治療を一生懸命されてやがては固執して苦しんでいる。流産や死産などを経験して、その苦しみからなかなか抜け出せずにいる。育児不安の中でイライラし、子どもに手を挙げてしまうことに悩んでいる。そうした苦悩の中にいる方たちは、まさに本当の意味での「いのち」というものに最も気づくことができる状況にあるのではないかと思います。

私自身も、最初の子どもは流産、2人目の出産では2000cc以上の大量出血をして死を意識した事があります。そして、子どもそのものが生きているいのちで、尊重すべきものであり、自分の意志の力の及ぶことではないことに気づかされました。順調にいって何も悩まない時ではなくて、苦しむという中にあってこそ、はじめて気づくものがあるのではないかと思います。

今自分のおかれた状況が、普通ではあり得ないような結果になって、いろいろな事を考えて気づこうとされている中に、光というものが差し込むような状況があるといいのではないかと感じています。けれども、光をもたらすようなお手伝いは、私ども医療者にはなかなか出来ません。その光を、お寺や聞法により、お母さんたちにいただけるといいのではないかと感じます。

池田　いのちの大切さということを、私どもが親鸞聖人の教えに学ぶとき、その核心部分は「いのちの私有化」という問題だと思います。

私たちの生き方というのは、その意味でまず自分を実体化してますね。ですから同時に他者をも実体化している。そこから当然、自分は自分、人は人と、分断化が生起しています。したがって私たちの生きかたは、いつでも他者と比較するという形でしか生きられない。他者とくらべるということでしか、自分の存在が実感できない、そういう生きかたになっていきます。他者とくらべてあるときは優越感、あるときは劣等感、その両極を揺れ動いて生きているというのが私たちのありかたですね。

そういう私たちのありかたは、もっとも深層的に言って「いのちの私有化に起因する」と指摘し、それに気づかされた智慧によって現在の苦と向きあってゆく主体的な生きかたを願われているのがお念仏の教えと言えましょう。

私が憶念しているレバノンの詩人といわれるひとの詩ですが、

あなたの子どもは
あなたの子どもではない
待ちこがれたいのちの
息子であり　娘である
あなたを経てきたが
あなたから来たのではない
あなたと　共にいるが
あなたに属してはいない

ここに仏教のこころ、とりわけ親鸞聖人のおこころと重なるものを強く感じています。これをふまえて私はさらに

いのちはつくれない
いのちはいのちから生まれる
そのお手伝いをする生命科学
生命科学もいのちのうち

と申したいことです。

妊娠、出産、育児、それらをとおして、いま申しあげたような、私有化することの許されないいのち、真に「公なるいのち」ということに気づかせられていく、めざめていく、そういうことがもっとも願われているのですね。

その意味で現場というところこそ、教えが私たちに告げている事柄を具体的に検証していくことのできる貴重な場所だということを、いまお聞きしていて強く感じました。

生きるってどういうこと

廣瀬　日本の生命科学の第一人者である村上和雄筑波大学名誉教授が、「サムシング・グレート（自然の偉大な力）」というテーマの講演でこんなことをおっしゃっていました。例えば大腸菌ということについていえば、それが何の成分からできているか、その遺伝子構造はどうなっているか、人間はすでに、それを知り尽くしています。様々な薬を作るなど利用もしています。しかし、人間自らが大腸菌を作ることはできない。その要素を集めてきても、そこにいのちを吹き込むことはできないのです。

科学者自身が、いのちから科学も生まれてきたのだということに改めて気づき、そこにスポットをあててきたように感じます。実際、多くの人も、子どもの頃から「もの」としてのいのちより、その奥にあるいのちを深く感じ取っているのではないでしょうか。

池田　授かったいのち、賜ったいのち。ナンバーワンでなくオンリーワン。このいのちの原点からいえば、なにものをもっても代えることができない。そういう、人間本来の尊厳性に目覚めるということが何よりも要請されているのですね。何か立派なこと、特別なことをするということでなく、一人一人顔が違うように、それぞれがそれぞれの「自らの分」を燃焼していく、尽くしていくということが、人生を「涅槃」（完全燃焼）に方向づける仏教の真実性と言えましょう。

治って当然？

池田　最近、産婦人科医が減っているということをニュースなどで聞きます。訴えられることが多いとか、勤務が過重であるとか…。そしてまた産婦人科にかぎらず、医療不信ということが非常に増幅しているという問題がありますが、それについてはどう思われますか？

廣瀬　最近ごくわずかですけれども感じることはあります。最初から態度に不信感があるというか。「医者なんて鼻持ちならない人間だ」というような、権威権力といったものへの反感や、マスコミやインターネットを通じて、先入観を持ってしまわれる場合もあると思います。医師と患者、あるいは看護師らも含め日本人のコミュニケーションの力が低下してきているということもあります。

戦前までの出産では多くの母親が命を落としていました。私が産婦人科医として勤務しはじめた頃も、年間岐阜県で少なくとも5～6人の妊産婦が亡くなってみえて、その数は決して0にはならないと思っていました。しかし、医療がさらに進歩して、近年0になる年があるのです。しかし、多くの方は、自分達がそのような医療の恩恵に預かれる素晴らしい時代や国に生まれたんだと、全然実感していない。あるいは病気は医療を受けて治って当然だと。異常な結果や良くない結果が出たとき、医療の方に問題があるんだと、どうしても受けいれられない・・そういう問題もあるように感じます。

池田　大変デリケートな、しかも大切な問題を学んだご提言だと思います。医療不信という現実から問われねばならぬものは何かという問題です。外には医療体制、内には自分自身（病気）。人為以前と人為の問題です。そこには人為を尽くすという面の詰めと、人為でどうすることもできない事柄への内観という課題とが横たわっていますね。

仏教と女性

廣瀬　ものに恵まれ、大きな苦労もないまま大人になり、妊娠出産育児でつまづき傷ついてしまう、そんな方が女性外来には多く来られます。沢山の方が道を求めているわけです。私もですけれど、本当に求めている。私なりのレベルで患者さんとそうした道を求める会話がしたい。私の祖母はよくお寺参りをしていました。仏教で女性を特別なものとした時代があると聞きますが、確かに母親というものは、子どもを通じて、より大きな悲しみや愛情を持つことが多く、聞法せざるを得ないものを抱えているような気がします。ぜひ、女性たちが救われていくような、女性としてのいのちを全うしていく光に気づくことのできる場を真宗で開いていっていただきたいと思います。

池田　医療の現場で、先生のような方が居られることは、とってもたのもしく、うれしく、尊く思われてなりません。貴重な刺激をいただきました。切磋琢磨よろしくお願い致します。

風をかんじて

「声為仏事」（しょういぶつじ）
……声、仏事を為す

諸の羅網及び衆の宝樹を吹きて、無量の、微妙の法音を演発す。万種の温雅の徳香を流布す。其れ聞くことある者は、塵労垢習自然に起きず。風その身に触るるに皆快楽を得となり。此の声仏事を為す。焉んぞ思議す可きや。

（『論註』「真聖全1・323頁」）

長く引用を致しましたが、「声為仏事」近頃気に入ってる言葉です。

お声明の第一の要素に「声」があげられます。私の手持ちの資料の中に「声の病」として、

一、能声の者
（声のよすぎる者）
二、早合点する者
三、拍子の好すぎる者。

声が能く美声で、リズム感能く、理解力も優れている、これがお声明には病であり、落とし穴なのだと指摘されています。資料は病の症状を「これらはそれを自負して錬磨習熟することを怠る」と記されてます。最初に誰がこのことを指摘したのかは分かりませんが、真面目で謙虚な人だったのでしょう。こうした意味からは、お声明の先生などと呼ばれる者は病重傷かもしれません。

私は竹鼻別院の列座という役から、毎年竹鼻保育園報恩講に参勤しております。年長組になると報恩講に向けて正信偈の練習をいたします。歌の如くに正信偈の文句を唱えながら通園する子がいるとも聞いたことがあります。そうしてむかえる報恩講。大きい声で一所懸命に、音程とか、文言とか、正しかろうが、誤っておろうが全く問題になりません。参詣された方でそれを問題にする人はいないでしょう。「一所懸命」が「声」になったお勤めは、その座に会った者に元気が湧きます。私はその度ごとに大谷派声明の原点だなと感動を覚えるのです。

「風その身に触るるに皆快楽を得」聞き手の思いもありますが声の響の作用です。これを仏事というのでしょう。無邪気な素直な園児の心持ちが初心に立ち返らせてくれます。仏事を為す声明を心がけたいと思います。

第六組　淨榮寺　上山信乗

こころのサイン

私は、自坊で保育園を営んでいて、主任保育士という立場です。仕事柄いろいろ相談を受けることが多く、園児の保護者や家族が主で、時には卒園児の保護者の場合もあります。自分自身の子育てについて自慢できることはほとんどなく、むしろ失敗談を基に話すことが多いのが現状です。最近は自分や園だけで対応できないことも有り、家族間の様々な問題や学校とのトラブルなど、自分の力量を超えた相談事に気が重くなる日々です。いっその事、関わらないようにしようかと思ったこともありました。

ある時、園児の母親の送迎時の様子が「どうもおかしい」と思いました。でもまたお節介をしても・・・と、積極的に関わりませんでした。しばらくすると、別の機関の人から、

「〇〇のお母さんちょっと言動がおかしいので、気をつけていてね」

と連絡をもらいました。慌てて電話をすると

「先生、私のSOSに気づいてくれた？私もうダメだわ！」

の返事でした。それから、本人の受け入れ先、子ども達の処遇について、公的な機関の力や親戚の方の援助をいただいてやっと落ち着くことができました。

もっと早くに関わっていればこんな事態には至らなかったかと思うと、自分の浅はかな思いに囚われ、適切な行動ができなかったことに情けない思いをしました。私は、私の立場で、与えられたことに一生懸命に関わっていくことが、自分に科せられた使命だと思いました。

岐阜教区坊守会長
第六組　光泉寺　吉田寿子

ぶつじスームイン 勤行＆読経

朝晩、お内仏でお勤めをしているけれど、これってなんだろう？

正信偈などを仏前で読むことを「お勤め」または「勤行」といいます。「自らが仏道を勤め行うこと」が勤行のもつ意味です。朝晩のお勤めに慣れ親しむことから誰でも仏道を歩むことができるようになるのです。

一四七三年、蓮如上人が越前の吉崎で、誰でもお勤めに参加できるよう、正信偈と和讃を開版され、仏前で勤行しお内仏を中心に生活する真宗の生活が一般に浸透するようになりました。(^o^)

お寺の報恩講にお参りしたら、高い大きな声でお勤めをしているのでびっくりした。あれはなに？

お寺の報恩講では、普段のお勤めより高い格調の読み方に節が変わり、どうしても声が大きくなります。それは、南無阿弥陀仏の教えや親鸞聖人への報恩謝徳という思いが報恩講ではより加わるからです。

法事でお坊さんがお経を読むけれど、これはいつから始まったの？

親鸞聖人が、法然上人のご命日に礼讃念仏を称えたことが記録（拾遺古徳伝）にあります。「聖人（法然上人）の廿五日の御念仏（御消息集）」という先師の命日にちなんだ習慣は、門弟の間で広まっていたようです。

ただ、現在のように「命日にお坊さんに読経してもらうこと」が目的でなく、親鸞聖人の当時は「命日に私がお念仏すること」に主眼があったのでしょう。

法事のお経は、後年、本願寺教団が儀式の整備をするなかで位置づけられ、広まっていったものと考えられます。

そもそも、なぜお経を読むのかしら？

読経は古くインドでお経が編纂された当時から始まっています。仏説無量寿経巻下に「たとい大火ありて三千大千世界に充満せんに、要ず当にこれを過ぎてこの経法を聞きて、歓喜信楽し、受持読誦し、説のごとく修行すべし」とあります。

お経を受持読誦し、それに従って実践する。これこそ仏道修行だったわけです。

中国の善導大師（613～681）は、浄土往生のための実践の方法を五正行としてあらわしました。

なかでも、称④名念仏こそ浄土往生の正定業とされています。

正定業に対し、助業という位置づけですが、読①誦が浄土往生のために中国の唐の時代でも民衆に勧められていることが分かります。

※五正行
①読誦（浄土の経典を読誦する）
②観察（弥陀とその浄土の相を心におもいうかべる）
③礼拝（弥陀を礼拝する）
④称名（南無阿弥陀仏を称える）
⑤讃嘆供養（弥陀の徳を讃嘆する）

中国　善導大師

自らお経を理解し、お経の如く実践するために勧められた「読経」ですが、中国の風習に馴染んでいく間に雨乞いの祈祷や追善回向のため読経されることが盛んになり、日本伝来後もおよそ鎮護国家や病気快癒のため読経されたため、「なぜお経を読むのか」があいまいになってしまいました。

読経や勤行それ自体は自分が救われたり、人を救ったりするために呪文のように行うものではありません。読経や勤行を通じて、南無阿弥陀仏一つで救われるという教えに出会っていく、そのことが求められているのです。